

大都会を支える エネルギー供給基地 そして

母校相馬高校への想い と 馬城会京浜支部 (※1)高普第 22 回卒 森 治嗣 (※2)

創立 110 周年記念を迎える母校相馬高校を卒業してから約 40 年が経つが、母校相馬高校時代の記憶は深く心に刻まれている。いまは武家屋敷跡に伝統と斬新さが織りなす新しい校舎に立て替えられているが、正面から入って真正面に向い立っていた、当時としてはまだ珍しい全館スチーム暖房の白い校舎は高校 3 年間の記憶から離れることはない。

我々の世代は、今の優れた現役諸君の世代のようにバレーボール部が全国大会出場の常連校であったり、また文科省スーパーサイエンスハイスクール指定校のような、全国的な活躍の記憶が無く谷間の世代のように感じてきたので、殊更後輩達の活躍は嬉しく元気づけられる。

母校とはもっぱら馬城会京浜支部の活動を通して幸い繋がりを持つことができている。馬城会京浜支部は馬城会支部の中でも最も活発な活動を通して母校を支えている支部の一つであり、寺島 (※3) 先輩のあと長堀 (※4) 先輩を支部長に戴き、渡部行 (※5) 先輩を副支部長として遠くから母校相馬高校を微力ながら支える活動のお手伝いをさせていただいている。その一方で、馬城会の諸先輩後輩との繋がりに大いに助けられているという感謝の思いは強い。

小職自身は、エネルギー産業で長年発電設備の安全などに関わる研究開発を国内海外の大学や研究所で担当してきた。福島県浜通りは新地火力をはじめ 3 つの最新鋭火力発電所、また福島第一および第二原子力発電所で、計 10 基の原子炉が稼働する世界的に見ても有数の電力供給基地となっており、大都会東京のライフラインを握っていると言っても過言ではない。このことは渡部行先輩の著書（光、熱、力そして情報、TBSブリタニカ刊）に詳しく書かれているが、これは首都圏でエネルギー産業に勤める地元出身者の誇りでもある。

発電所には勿論地元の人たちが多数働いており、相馬高校の先輩後輩も従事しているが、原油価格の高騰に左右されない且つ二酸化炭素排出が極めて少ない原子力発電所と、燃料多様化による安価で且つ安定供給される石炭燃焼の最新鋭火力は、近年その重要さが見直されてきている。

しかしながら、巨大な発電所の建設と運転には、地元の理解と良好な信頼関係を築き上げることが必要なことは言うまでもなく、母校の校訓である何事にもまごころを尽くしてあたる至誠が、これほど求められる場はないと感じてきた。

小職は日本機械学会理事を拝命しているこの機会を通して、このような活動を学会レベルでも推進してきたが、それ以上に馬城会の諸先輩や後輩諸君との絆を通じた相馬弁の苦言やアドバイスが、最も心に残る貴重な言葉だったことを身に染みて感じてきた。

故郷は大都会東京を支えるエネルギー供給基地でもあり、故郷はエネルギー産業に身を置く小職の誇りでもある。遠くから想う母校相馬高校と相馬野馬追いへの想い、馬城会諸先輩、後輩諸君との見えない絆は公私をこえた貴重な財産でもあり、これから世に出る後輩諸君に馬城会とその各支部での繋がり、母校を支える活動を大切にして欲しいと思う。

(※1) 創立110周年記念誌『紅の旗』(2009(平成21)年1月発行)「思い出の記」〈ああ、我らが青春の日々よ〉より

(※2) 昭和45(1970)年卒、鹿島出身。

(※3) 寺島泰三氏。高普第4回、昭和27(1952)年卒、福田出身。元統合幕僚会議議長。第9代馬城会長。

馬城かわら版第127号「相馬中学・相馬高校の思い出」

「創立百十周年及び校歌制定百周年記念式典 ご挨拶」

(※4) 長堀(斉藤)守弘氏。高普第4回、昭和27(1952)年卒、東京出身。前明治大学理事長。

馬城かわら版第130号(思い出の記)「母校を愛す」

(創立百十周年記念講演)「夢と希望…高校生から次のステップへ」

(※5) 渡部 行氏。高普第1回、昭和24年(1949)年卒。飯豊出身。元産経新聞編集委員・経済評論家。

馬城かわら版第102号(思い出の記)「あゝ紅の血は燃ゆる」

馬城かわら版第119号(思い出の記)「困窮、混迷、大改革の六年間・進学は最高の中47回・高1回卒」

(転記&※脚注 村山)